（別紙２）

論文審査の結果の要旨

氏名　辻部（藤川）亮子

１２世紀後半から１３世紀末にかけて盛んに制作された北フランスの中世抒情詩は、南仏トルバドゥールの影響下にある「宮廷風恋愛詩」とその他の「民衆的抒情詩」に大別され、ついで後者は主題となるヒロインや背景となる情景等の観点から「パストレル」「お針歌」「不幸な人妻の歌」などにジャンル分けされてきた。その区分は近年ますます細分化され、ジャンルごとにしか論じられない傾向にある。辻部氏の論文は、長い時間をかけた文献調査の末にこの抒情詩群の大半を体系的に読解し、従来の分類法を批判的に検討し直したものであり、あわせてこれらの抒情詩の詩的主題を統一的に把握する新たな観点を提示した労作である。

論文は５章からなる。序論と第１章はまず、これまでの研究が見過ごしていた、いずれのジャンルにもおさまりきらない多数の実例を検討し、従来のジャンル論の矛盾点と限界を指摘する。ついで辻部氏は、中世の詩論書におけるジャンル分類法に着目。そこから、詩の主題とヒロインの社会的身分、また社会的身分と文体の間には、二段階にわたって調和的な「相応」の関係があるべきだとする当時の制作理念を導き出す。辻部氏によれば中世抒情詩には順に、１）詩的主題、２）ヒロインのさまざまな社会的身分、３）詩の情景や語りの形式という三つの位相があり、上位の位相がこの「相応」という観点から下位の位相を規定している。辻部氏の提示する構造モデルの意義は大きく、これによって、従来の分類法が位相の上下関係を顧慮せず、平面的で重複の多いジャンル分けに終始してきた次第がよく理解される。

第２章以下は、このように立体的に把握された中世抒情詩の構造モデルの検証部分であり、ヒロインの肉体の美というテーマが出発点となる。辻部氏は豊富な例示によって、この美の叙述がすべての身分のヒロインについて同一の紋切り型に過ぎず、詩的主題たりえないことを指摘。この叙述は、むしろ、ヒロインに慈悲、礼節、貞潔という中世的・封建的美徳のいずれかが欠如していることを示す、単なる導入部としてしか機能していないことを説得的に論証する。しかし、これらの美徳の欠如（についての嘆きや怒り）だけが中世抒情詩の主題なのではない。第４章では、従来の中世抒情詩の研究書やアンソロジーがほとんど無視していたところの、ヒロインが美徳のいずれかを具備する多数の例を掲げ、そこから、最上位の位相にある詩的主題とは、封建的美徳を具現する「至純の愛」についての、肯定か否定か、いずれかの言及にあると結論する。第５章および結論は、この構造モデルの拡張部分であり、「宮廷風恋愛詩」以外のジャンルの作品にも同じ原理が働き、たとえば「至純の愛」の否定としての「宮廷風恋愛詩」の中傷者と「パストレル」の粗暴な騎士の場合のように、同じ構成要素が出現し、同じ語彙・表現が用いられていることが示され、上述の結論が補強されている。

辻部氏の論文の功績は、「宮廷風恋愛詩」とそれ以外のジャンルの詩的主題の同質性を説得的に示した点にある。しかも議論は、仮説の提示部分もその論証部分も、これまで無視されてきた作品を含む、多数の例示によって着実に組み立てられている。一部の作品や詩人については先行研究の参照に不十分なところがあり、また広く流布した影響力の強い作品や詩人を他の無名の作品や詩人と同列に論じてよいかどうかという問題点は残るが、辻部氏が厖大なコーパスを取り扱い、そこに新しい解釈の視点を提示しえた点は高く評価されるべきである。よって審査委員会は、本論文が博士（文学）の学位に値するものであるという結論に達した。